

日本語とロシア語の結果構文に対する形態統語論的分析

【要旨】

本発表では、生成文法における形態統語理論を用いて日本語とロシア語における結果構文の共通点と相違点について分析し、特にその相違点が両言語の一般的な統語特徴と形態論的性質の違いから導けることを示す。

日本語とロシア語では、以下に示すように、ある要素（一重下線部）の有無によって結果二次述部の生起が左右されることがある。

(1) a. Ivan wy-ter stol nachisto.

Ivan PERF-wiped the table clean.

b. * Ivan ter stol nachisto.

Ivan was wiping the table clean.

(2) a. 花子が金属を平らに叩き伸ばした。

b. ?*花子が金属を平らに叩いた。

両言語ともに、英語との異同については統語的な観点からの研究が存在するが (Svenonius (2004), Hasegawa (1999) など)、形態的認可手段を持つ言語同士を詳細に比較した対照研究は管見の限り無い。

この認可に関わる要素は、形態論的には、ロシア語ではアスペクトに関わる接頭辞であり、日本語では複合動詞の後部要素であるが、本発表では事象構造を統語構造に反映させるアプローチを用いて、両要素が統語的には結果二次述部の認可子であることを示す。その上で、表面形の違いは、両言語における語順の違いと、形態的融合(merger)の適用の仕方から求められることを提案する。さらに、結果二次述部が両言語において副詞で現れる事実（二重下線部）についても、それらの要素が二次述部であり統語的には副詞でもあることから説明できると論じる。

【引用文献】

Hasegawa, Nobuko. 1999 The Syntax of Resultatives. *Linguistics: In Search of the Human Mind*. pp. 178-208. Kaitakusha.

Svenonius, Peter. 2004. Slavic Prefixes inside and outside VP. In *Nordlyd 32.2: Special issue on Slavic prefixes*, edited by Peter Svenonius, pp. 205–253. University of Tromsø.